

出逢いからはじまる連帯の思想

——森崎和江にとっての沖縄——

山本真知子

はじめに：

沖縄の海兵隊移設問題をめぐる運動で語られる「連帯」から

軍事再編過程が「抑止力」と「沖縄の負担軽減」という名目で推し進められるのをはね返すように、それがほかならぬいのちを危機にさらすものであることは繰り返し告発され、脱軍事化にむけた具体的な行動もまた起こされてきた。と同時に、バラバラな場所で展開されてきた運動は、たがいに出会い、連帯することを通して、こうした状況とともに立ち向かうべく模索をかさねつづけている。その国境を越えた脱軍事化の運動の一つに、沖縄・東村高江とグアムのあいだで2017年6月以降つづいている交流がある。住民らはたがいの地域を訪れ、軍事基地ととなりあわせの暮らしの実態や危険性だけでなく、文化や歴史を学ぶなど草の根の活動をもってきた。その運動は、交流をかさねていく過程において、それぞれの運動を力づける役割も担いはじめている。

とはいえ、「連帯」をめぐる議論は、なにも目新しいものではなく、沖縄の戦後運動史でも繰り返し議論されてきた。なかでも沖縄の運動の文脈において、1960年代後半～1970年代前半は、1972年の施政権返還をめぐって日本との関係性を根底から問いなおそうとラディカルな言論が展開された時代であった。今回注目しようとしているのは、同時代において朝鮮出身の植民者二世である詩人・森崎和江が提示した、視点と態度である。

本研究ノートでは、森崎和江がどのように／どのような連帯のあり方を沖縄とのあいだにつくっていきこうと模索していたのかを探っていく。まず1節で本ノートの問題設定を明確にしたうえで、2節で森崎が沖縄に遭遇することを通して紡ぎ出してきた連帯の思想に迫っていくことにしよう。

I. 沖縄と森崎の交わる地点

1960年代末期、1945年以降米軍占領下に置かれつづけてきた沖縄では、「復帰」

運動が島を覆いつくすなか、「祖国復帰」「施政権返還」することが自明化していた。1967年11月に開かれたジョンソン大統領と佐藤首相の会談後、「両三年内」に沖縄の施政権返還の時期を合意することが発表され、1969年11月の日米合同声明によって1972年の返還が合意された。「異民族支配からの脱却」というスローガンのもと、国家の帰属への無前提な肯定感が人々のあいだに高まっていたなかで、沖縄と本土の関係性をめぐって描き出された未来像に亀裂を生じさせようとしたのが、「反復帰」の思想であった。これは、沖縄の「復帰」に一筋の希望を見出し求めつづけてきた人々に思想的な転換を迫るものであった一方、国家の帰属に議論が集中していた点で、復帰論に見られる傾向とかさなった。これと同時期に——しかし、「反復帰」という立場からではなく——、森崎が沖縄を考えるなかで試みようとしていたのは、労働を通して、異民族あるいは他者との出逢いの思想を紡ぎ出すというものであった——ここに、彼女の思想的な特徴を認めることができる。

これについては後段で詳しく述べることにして、森崎が掘り下げてきた連帯をめぐる思想が、どのように跡付けられてきたか見ていくことにしよう。森崎論の先駆者の一人である水溜真由美は、筑豊の炭坑労働者たちや女性たちとの出逢い、そしてそこから始まった具体的ななかかわりを描き出すことを通して森崎の思想を受け止めてきた。しかしながら、森崎がどう沖縄を考えていたのかということは、森崎もかかっていた「おきなわを考える会」（1969～1971年）、および同会が刊行していた『わが「おきなわ」』を、数ある彼女の活動の一つとして紹介するに留まっていることから、十分に深められているとはいえない¹。森崎がどのように沖縄と日本との関係性を問いなおそうとしていたのかを、筑豊の労働者たちとの出逢いと行動の軌跡から明らかにしていく作業が求められている。

大畑凜は、この森崎と沖縄の関係性に注目し、筑豊と沖縄の関係において論じる試みをすではじめている。大畑は、1970年前後の筑豊において、閉山・合理化によって職を失い流動化する労働者たちが直面している現状とその歴史を掘り起こしていくなかで、まず自分（たち）のなかに「わが沖縄」を見出し、そこから筑豊のありようが逆照射されていくプロセスに注目した。そしてそこから、「共同（共働）的な思想」がかたちづくられていく姿勢のうちに、森崎にとっての沖縄、すなわち「方法としての筑豊」があったであろう可能性を示している²。さらに、「異なるようにおもわれる問題をつなぎあわせむすんでいく想像力のあり方」の重要性を説き、「沖縄」と記されていないところに沖縄を「感じとる」ことを、「わたしたちが学ぶべき生の技法」としても提示している³

だが、森崎が引き揚げ後の日本社会でもがきながら紡いできた連帯への道筋は、バラバラなものを単に「想像力」でつなぐとただだけでは、説明したことにな

らないだろう。感受性や想像力の話に切り縮めてしてしまうのとは違った展開が求められている。

先に結論めいたことをいってしまえば、森崎がどのように沖縄を捉えようとしていたのかということは、彼女が経験してきた他者との具体的な出逢いと交流の軌跡をたどっていくことによって浮かび上がってくるのではないだろうか。さらにいえば、森崎にとっての沖縄を考えるとというのは、他者との出逢いを通して、自らの体験してきたことを掘り起こし、問いをぶつけながら対話していく過程そのものを含んでいるのかもしれない。

後者に関しては、仲村渠政彦さん（1948年沖縄生まれ・福岡在住）が、自らの生の軌跡を振り返るなかで、森崎の「ふるさと喪失の生」と仲村渠さん自身の「ふるさとを蹂躪されつづけているオキナワの生」の「出逢い」と、そこから紡がれてきた思想と実践を書き留め、発表しはじめている⁴。重要なのは、その出逢いが文章のなかに生きる森崎との出逢いに留まらないということだろう。むしろその出逢いは、運動にかかわるなかで足を運ぶようになった森崎のもとでおしゃべりをしたり、その傍らで彼女のたたずまいに触れたりしていくなかで、自分自身を解放していこうとする営為としてある⁵。仲村渠さんの生の軌跡から浮かび上がってくる森崎の思想は、別稿に譲ることにして、今回は前者に重点を置いて論じていくこととしたい。というのも、これまでの森崎にかかわる議論では、すでに述べたように、彼女がことばを紡ぎだしていく過程において降り積もってきた労働者たちとの対話や、沖縄をめぐる運動へのかかわりの部分が、十分に論じられてこなかったように思われるからだ。本ノートはその意味で、森崎にとっての沖縄を、彼女をとりまく現場性に引き寄せて考えるための試みとしてある。

II. 沖縄を考えると

1. 森崎和江にとっての沖縄

1969年から1971年にかけて、森崎は沖縄の本土「復帰」をめぐる展開されたある運動にかかわりながら、生活と労働に軸を据えた独自の思想と実践を通して、沖縄を考え、その連帯のあり方をきりひらくことに注力した。

沖縄の施政権返還を目前に控えていた当時、森崎は炭鉱が閉山したあとの筑豊の地で、なにを思っていたのか。なぜ、どのように沖縄を考えていたのか。そこから、どんな連帯を夢想していたのか。

こうした問いにこたえるには、彼女が沖縄の本土「復帰」に対して抱いていた危機感に接近して考える必要がある。危機感と一言でいっても、その感覚はいくつかの層をなしている。

まず挙げられるのが、沖縄が基地機能をのこしたまま本土の施政権下に置かれるのであれば、「沖縄の筑豊化」が起こるのではないかというものだ。森崎は、当時の状況からなにを感じ、受けとっていたのか。その手ざわりは、1969年12月4日に米軍が基地労働者の大量解雇を通告したことを受け、1970年初頭にはじまった全沖縄軍労働組合（全軍労）の解雇撤回を求める闘争が、三池闘争以降のたたかいのなかで、筑豊の坑夫たちの「流した血がさらに白けるほどの具体性」として迫ってきた、という話からも伝わってくるだろう⁶。彼女は、筑豊が閉山後にたどってきた状況を踏まえて、「民意を本土が中央集権機構によって吸いあげて、残りかすには生活保護をあたえる」だろうことを見抜いていた⁷。そのどこに問題があるのかといえば、それは民衆が「労働を基本軸」としてつくってきた社会的関係を破壊することにはかならない点にある。

多くの人たちが沖縄から職を求めて本土に流れていけば、労働者間の共同性も壊され、地域内の関係性も希薄になった就労先で、戸惑うことになるだろう。森崎は、近い未来に流民化するであろう沖縄の労働者たちのことを思い、これを彼女自身にとっての「おそれ」として感じとっていたのだ。なぜ自らにとっての危機感として受け止めたのかといえば、それは、彼女にとって沖縄を考えるということが、「私のなかに自分にとって労働（創造的生存）とは何か」を見出そうとする営みとしてあったからだ⁸。この一見飛躍しているようにも思われる、沖縄と労働の関係性こそが、日本帝国主義から敗戦後に至るまで貫かれている問題を突き、「被支配体相互の主体的思想」を掘り起こすために不可欠な要素として、彼女の手には握られているのである⁹。

その沖縄における労働をとりまく状況性は、つぎのように解釈されている。沖縄の施政権が返還される以前は、沖縄と本土の人々のあいだで労働をともにするという時間が共有されておらず、戦前に朝鮮・沖縄・本土のごく一部の下層労働者たちが、百姓職工として接触したことがあるに過ぎなかった¹⁰。この他民族との接触は、被支配層の労働者たちによって、日常のなかにあらわれた「同階層の異族」との出逢いとして受けとめられていたものだった——これは、支配権力を有する者たちが、他民族の労働者たちを「同族集団内の異質」として捉えたのと明確に区別されている¹¹。

さてその後、敗戦を境に、被支配階層のあいだで静かにつづいてきた他民族との出逢いと交流は途絶え、社会的な関係性は地域ごとに異なる質をもつようになっていった。1970年代当時、本土は賃労働を通して自己実現しようとする「幻想」に覆われていた。たとえば、資本を独占する大企業は、下請け・孫請け会社を増やし、近隣の「後進地域」（韓国・台湾・東南アジア）に進出するなど膨張しつづけていた一方で、賃労働および社会的関係から断絶した人たち——「精神的病

者」あるいは「棄民」——は、精神保養施設で「機能を回復」して、資本社会への「復帰」が目指された。だが、こうした本土の資本による支配の及ばぬ、米軍占領下に置かれていた沖縄では、すべての労働が「人間性の収奪」にあたるという認識が共有されていた。だからこそ、「自己の本来性に依拠した内発的想像力は、賃労働と別次元の共同空間に結集されつづけた」のだと、森崎はいう¹²。

この「内発的想像力」とは、「農耕の政治的儀礼の象徴としての天皇」に吸収されない民衆の創造性、すなわち「自律性の内的根拠」を指している¹³。沖縄島に隣接する与論島のシニユグ祭を例にすると、わかりやすい。森崎は、同祭のなかで神と人が「共同作業」を通して、それぞれに神格と人格をもちうるという発想に目を見張った¹⁴。すでに本土に浸透している農耕儀礼のシンボルとしての天皇を尊ぶ風習が、与論島には入り込んでいないということ——すなわち、農耕儀礼に労働と結びついた、農民の独自性がのこされているということ——に感動したのである。

これは、2つめの危機感につながっている。森崎は、以上に示した沖縄の特性を、「民衆を主体とした民族観念の確立と生活史的伝統の固有性の発展とのために」使うべきだと考えていた。だからこそ、沖縄の人々が労働を通して独自に形成してきた歴史が無視された「本土返還は、沖縄の脱思想化」につながるのではないかと危惧していたのである¹⁵。

繰り返すようだが、森崎が危機として感知し執拗に問い考えぬいてきたその根底には、本土の人たちのうちに顕在化しつづける、支配の論理に基づく共同体幻想があった。森崎は、沖縄戦での日本兵による島民の殺害に、関東大震災直後に起きた朝鮮人殺害事件をかさねて想起しながら、こう問いを突き付ける。

沖縄の復帰を、体制側も反体制側も、同質性の接続として幻想しないと安定しない。なぜなのか。沖縄民衆がアメリカ軍政下の諸労働に（そしてかつてやまとんちゅによる強要のもとで）自己を託さず、伝承された内在空間をくりかえし現実へと創造して力を結集させたことを、私たちは自分らへ向けられた殺傷のまなごしとして感じ得るだろうか。あのまなごしがそのまま、海を渡るイナゴの大群のようにおそう図を、私たちは精神風土に描き得るのか。例えば沖縄の復帰を、戦争中の殺人行為の摘発として、恐怖する本土民衆がいるだろうか¹⁶。

沖縄が本土「復帰」するにあたって、本土の人たちが、沖縄戦で日本兵に殺害され、米軍に占領下に留め置かれてきた沖縄から「殺傷のまなごし」が向けられていることを感受し得ないということ。その鈍感さ、無頓着さこそが、「同質性の

接続」という幻想を再生産し、異族との対等な関係構築を阻んでいることに、彼女は心づいていた。だからこそ、「あのまなざしがそのまま、海を渡るイナゴの大群のようにおそう図を、私たちは精神風土に描き得るのか」という問いに強い批判を込めたのだろう。そこには、異質さを認めあつたうえでどう関係を築いていくかが問われぬまま、天皇制ありきの共同体が幻想されつづけていくことへの危機感がにじみでている。

ここで立ち返っておきたいのは、こうした森崎が沖縄の施政権返還前夜に抱え込んでいた問題意識が、筑豊の労働者たちに出逢い、彼女／彼らが抱える問題に自らをかかわらせていくなかで、個々のうちに抑圧されてきた炭坑での体験や運動に敗れ負った傷（心情）を受け止めようとしてきた実践と結びついているということだ。彼女は、筑豊で合理化反対闘争をたたかった者たちが、その体験を語りたがらない、沈黙しつづけているという状況に目を留め、地域のなかの運動がなぜ持続しえなかったかを問題にした。念頭に置かれていたのは、沖縄の運動とのあいだに横たわる圧倒的な「ひらき」である。森崎は、「たたかいの体験を、それを共有したものの共同の資産として骨肉化するところの精神的な核が、永続して存在するか否か」という視点から、沖縄と筑豊の運動を比較し、そこに決定的な違いがあることにこだわった¹⁷。

戦後の本土における運動といえば、人々が立ち上がってはたちまち姿を消していくという繰り返しであった。森崎は自身もかかわっていた大正行動隊の活動を想起しながら、個々人の「想像性」だけを頼りに運動が形成されてきた一方で、地域内あるいは一人ひとりのあいだで「共通の歴史の核」が掘り起こされえなかったことを指摘している¹⁸。そのうえで、全軍労の闘争を支援するという行為に潜む問題を、つぎのように強く押し出したのである。

本土の（そしてこの反映する経済成長社会の）反体制意識は、闘いを民衆すべてのものへと骨肉化する核もないかわりにそれに縛られることもなく、風見の鳥のような回転のまま本土をすりぬける。海外へむかう¹⁹。

ここで彼女によって重く受け止められているのは、自らの経験してきたことと無関係に沖縄を一問題として据えて、沖縄の運動にかかわる本土の人々の意識のありようだ。それが、体制側と反体制側の見境もなく運動を渡り歩いていく姿、すなわち回転する「風見の鳥」の姿において捉えられているのは、痛烈な批判としていまも響く。

以上に記した沖縄の復帰をめぐる問題意識は、森崎個人の思想的営みのなかで完結させられていたわけではなかった。次節では、彼女もゆるいつながりをもつ

ていたという、筑豊・北九州の労働者たちが中心となって展開した「おきなわを考える会」の活動と、同機関紙『わが「おきなわ』から沖縄との連帯がどのように試みられていたのか、その実践の軌跡をたどっていく。

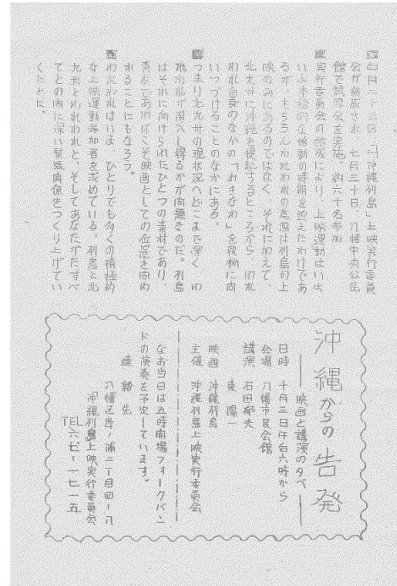
2. おきなわを考える会・『わが「おきなわ』と森崎和江

「おきなわを考える会」（以下、会）は、北九州市八幡区を拠点に展開された沖縄を考える「サークル」である。1969年4月～1971年7月まで、ガリ版刷りの機関誌『わが「おきなわ』²⁰を不定期に発行しながら、映画の上映会やデモなどを行った。

同会は、中間にある森崎の家におしゃべりの場を求めて足を運んでいた、炭鉱離職者たちが中心となってはじまっている。彼女／彼らは、労働者としての権利をまともにまもろうとしない下請け・孫請け会社で働きながら、ほかの運動に参加したこともあったがそりが合わずに孤立していた。こうした近似する体験をたがいにもった者たちが集まりグループをつくろうとしていたときに、この「おきなわを考える会」という名前を提案したのが森崎であり、彼女はその後会の一員としてかかわりつづけた²¹。

会を発足したそもそもの目的は、ドキュメンタリー映画『沖縄列島』の上映会を開催することにあった。上映会は、1969年10月3日午後6時より八幡市民会館で開催された。同上映会を開くにあたって共有されていた認識は、「北九州に沖縄を提起するところから、われわれ自身のなかの『おきなわ』を執拗に問いつづける」というものであった。『沖縄列島』は、「北九州の現状況へどこまで深く、われわれが潜入し得るか」ということを考えるための「ひとつの素材」として取り上げられたのだという【資料1】²²。

この上映会で掲げられていた「われわれ自身のなかの『おきなわ』を問う」というのは、会の根幹を支えるテーマでもあった。『わが「おきなわ』第1号に掲載された巻頭言『『わが「おきなわ』 発刊にあたって』には、北九州および筑豊を問いなおそうという意思が刻み込まれている。以下、一部引用する。



【資料1】『わが「おきなわ』第4号1969年7月、13頁。「伝言板」の欄に掲載された上映会の告知文。

(前略)〈わが「おきなわ」〉とは、このヴェールの奥に生きる一見グロテスクな世界なのだ。緑と太陽の都市を標榜しつづけてきた北九州市の、緑と太陽とが共に煤塵に色あせていくように「文化的」であるということが無残にもつき崩されていく世界である。それは同時に、「わが北九州」であり、「わが筑豊」であり、「わが未開放部落」であり、かつ「わが職場」であり、そしていったい何と名付けるべきだろうか(中略)。

「おきなわを考える会」は、直接には沖縄を焦点に据えながら、広く「おきなわ」を考えていくサークルである。〈わが「おきなわ」〉は、そのサークルを中心としたパンフであり、何よりも多くの人々から支えられてゆく体のものである²³。

会は、筑豊をどう考えるかを問うプロセスのなかに「おきなわ」を考えるということを設定していた。その背景にあったのはなにかといえば、炭鉱閉山によって職を失い、生活保護への依存が深刻化している筑豊のどんずまりの状況であった。そしてそれこそが、近代化した都市・北九州がまとってきた「ヴェールの奥」にある「グロテスクな世界」の姿でもあったのだろう。ここで浮上するのは、「グロテスクな世界」として語られる「わが〇〇」が、いったい何なのかという問いだ。『わが「おきなわ」』第10号(1971年1月)に森崎が寄せた文章には、以上の「発刊にあたって」と響き合うことばが並ぶ。

くらい海は、各歴史社会の心的傷害への潜行によって、少しずつ明るむ。または私たちは、他系列のそれが、生存へのやさしさによってつらぬかれているのが感知し得るまで——そしてそのやさしさの有りようが固有の体系を持つのが見えてくるまで——無私に接近する時、総合のための媒体者となる²⁴。

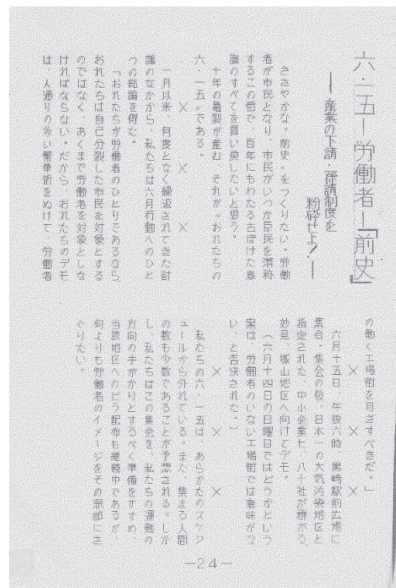
まず、この「くらい海」というのは、「グロテスクな世界」にかさなり合うものとして思い描くことができるだろう。両者とも、幻想で打ち固められた一見明るい世界において、「心的傷害」と呼ばれる自他の傷の在り処を確かめながら他者の生きてきた断層に出逢うことで、近代化する社会の断層を掘り起こしていく過程を通して暗がりに身を潜めていた者たちのもとに光が送り届けられるようになるかもしれない可能性が示唆されている——森崎は、自分にとって異質な集団が経験してきた時空間を平板な物語に閉じ込めるのではなく、一人ひとりの具体的な生の痕跡を痛みも含めて感じとることからはじまる関係性に光を見たのではないだろうか。だが同時に注意したいのは、それが「総合のための媒体者」になっ

ていく過程とともにあるということであり、自らの置かれた状況への否定性から垣間見ることができた未来でもあったかもしれないということだ。

では、「媒体者」とはどんな存在なのだろうか。森崎は別の文章中に、「破壊と創造とをかねそなえた働きを、集団内に持ち込む存在」として、「媒介者」を説明している²⁵。これは、「媒体者」と明確に区別されたものではないだろう。ということかといえ、森崎が媒体者あるいは媒介者ということばで示そうとしていたのは、誰かが抱え込んできた傷とともに生きようとする営みを通して、既存の集団を壊しながら別の関係性を創造的につくっていくとする存在だったからだ。このようにして媒体者／媒介者としての「わたし」あるいは「わたしたち」を考えると、会が『わが「おきなわ』を単に「パンフ」という紙媒体としてではなく、「多くの人々から支えられてゆく体のもの」という、複数の人たちがかわりあうなかで変わっていくメディアとして捉えていたことにも通じる視点だろう。

では、会のメンバーらは、組織されていない下層労働者たちとともに、どのように集団をどうつくろうとしていたのだろうか。1970年6月15日に北九州市八幡区黒崎で行われた、「安保粉碎・沖縄解放・下請け孫請け制度反対」をアピールする集会とデモの準備の様子は、その一端をうかがわせる【資料2】。まず会では、「指導」や「支配」をするためにビラを撒かせるということをしなかった。また、「六・一五」に向けて「わがおきなわ行動委員会」を発足させたのだが、その関心は組織化することではなく、一人ひとりが「内発させる反権力意志」をかたちにする「創造性」を外に引き出そうとすることに向けられていたという²⁶。

この「六・一五」前日、朝の通勤途中に下請け工らにビラを撒いていた同会メンバーがいた。そのビラは、「人民大衆よ！」という呼びかけではじまっていた²⁷。森崎は、この「人民大衆」という造語に注目し、そこに立脚して個々の「自我を確立させ」とともに、自分たちの「歴史性を集団化」しようと模索しはじめていることを指摘した²⁸。さらに、その「自我」や「歴史性」が、労働を通して自分たちの身体に刻み込まれてきたもの、すなわち「同族集団的結集に



【資料2】『わが「おきなわ』第9号 1970年6月、24頁。編集後記のあとに掲載された「六・一五」の告知文。

よる思想的傷」と「機械的開発によって受けつつある具体的傷」とにかかわっていることも見逃さなかった²⁹。

それにしても、森崎はなぜこの「人民大衆」ということばに目を留めたのだろうか。彼女は「民衆ことばの発生」（1972 [1974]）という随筆のなかで、抑圧された状況下でともに働くことを通して、「新しい意識空間」が生まれ、「共通のことば」が「肉体の場につくられる」という、ことばに刻まれてきた生の軌跡に注目している³⁰。森崎は、この「人民大衆」ということばに、横のつながりが断たれながらも同様に過酷な労働形態のなかに身をさらしている労働者たちの肉体を感じとっていたのだろう。それだけでなく、そのことばのもとに鍛えられようとしている集団があることにも、気づいていたのではないだろうか。

おわりに

本ノートでは、連帯のあり方を問い考えるための一つの試みとして、森崎和江がどのように沖縄に出逢おうとしていたのか、そしてどのような筑豊の労働者たちとのかかわりのなかで、沖縄を考えつづけてきたのかを見てきた。そこから浮かび上がってきたのは、森崎にとっての連帯の思想は、一人ひとりが自らの生きてきた痕跡を掘り下げていくなかで、他者との出逢いを契機として、どう連帯していくかを模索しつづけていく過程としてあるかもしれない、という可能性だ。問われているのは、連帯そのものよりも、出逢いのありかたを模索することのほうにある。

森崎を読むことが、単に森崎の思想を分析するための行為ではないということは、ここにおいて再び批判性をもちはじめるだろう。誤解をおそれずにいえば、それは、森崎のことばが現場性に差し戻されるときに、彼女がのこしてきた連帯の思想が本当の輝きを取り戻すということでもあるのではないだろうか。

最後に、以上に記した森崎の連帯をめぐる思想を、冒頭で触れた米海兵隊移転問題をめぐって展開されはじめたグアム・沖縄・日本間の交流に接続して、本ノートを締めくりたい。東村高江の現状に少し説明を加えると、2016年に新たなヘリパッドが完成してから、米軍機は日夜低空飛行を繰り返し、大型米軍車両は県道・村道・農道を我が物顔で走るようになり、基地周辺に住む住民は訓練が激化していくのを肌で感じとりはじめています。そうしたなか、グアムをはじめ国内外で展開される米軍再編過程に抗う人々と手を取り合い、ともに生き延びていくための行動が起こり、それはいまもつづいている。

だがここではあくまでも、軍事化による被害者の立場という共通項があるからといって、出逢いからはじまる連帯が保障されているわけではないことに、注意

を払いたい。重要なのは、一人ひとりが内省的に問い考えるなかで、他者との出逢いを求め、その出逢いからはじまる対話からことばを反芻しつづけていく、そのような関係性にあるからだ。

——森崎の思想的な挑戦がわたしたちに投げかけつづけているのは、この自らをとりまく場において、その断層を掘り起こしながら出逢おうとする、まさに出逢いの思想としての連帯を模索しているか、という問いなのかもしれない。

謝辞

本ノートの執筆にあたっては、北海道大学大学院文学研究院の水溜真由美教授から資料の提供等、ご協力いただきました。深く感謝いたします。

註

- 1 水溜真由美『「サークル村」と森崎和江——交流と連帯のヴィジョン』（ナカニシヤ出版、2013）：291-298。
- 2 大畑凜「『わが』の思想について——森崎和江と沖縄をめぐる覚書」『脈』91, (2016)：88.
- 3 大畑凜「筑豊と沖縄をつなぎむすぶ」『越境広場』7, (2020)：219.
- 4 仲村渠政彦「オキナワマンガタミーと森崎和江さんのおもごし（その一）」『越境広場』7, (2020)：184.
- 5 仲村渠政彦さんへのインタビュー（2020年2月14日、福岡市にて実施）より。
- 6 森崎和江「想像力の自律性はたたかひの靱帯か——筑豊・沖縄・朝鮮——」『ははのくにとの幻想婚』（現代思潮社、1976；初出『日本読書新聞』1970年2月16日）：97.
- 7 森崎和江「労働の身分制を越えるために——筑豊からの報告——」『ははのくにとの幻想婚』（現代思潮社、1976；初出『月刊 たいまつ』5, 1970）：51.
- 8 森崎和江「アンチ天皇制感覚」『異族の原基』（大和書房、1971；初出『現代の眼』9月、1971）：194-195.（以下、「アンチ」）.
- 9 森崎和江「民衆における異集団との接触の思想」谷川健一編『叢書 わが沖縄第六巻 沖縄の思想』（木耳社、1970）：239-240.（以下、「民衆」）.
- 10 「アンチ」：189-190.
- 11 「民衆」：231.
- 12 「アンチ」：189-190.
- 13 *Ibid.*：191.
- 14 *Ibid.*：194-195.
- 15 「民衆」：228.
- 16 *Ibid.*：193.
- 17 森崎和江「想像力の自律性はたたかひの靱帯か——筑豊・沖縄・朝鮮——」（『ははのくにとの幻想婚』現代思潮社、1976；初出『日本読書新聞』1970年2月16日）：98.
- 18 *Ibid.*
- 19 *Ibid.*：99.
- 20 『わが「おきなわ』』（第1号～第11号）は、いずれも個人蔵である。
- 21 仲村渠政彦さんへのインタビュー（2019年11月3日、宗像市にて実施）より。
- 22 おきなわを考える会「伝言板」『わが「おきなわ』』4, (1969)：13.
- 23 おきなわを考える会「発刊にあたって——おきなわを考える会」『わが「おきなわ』』1, (1969)：2-3.
- 24 森崎和江「私たちにとっての意識空間の総合性——谷川健一著「沖縄・辺境の時間と空間」にふれつつ」（『わが「おきなわ』』10, 1971）：20.
- 25 森崎和江「媒介者の思想——状況論を超えるもの——」（『ははのくにとの幻想婚』現代思潮社、1976；初出『九州大学新聞』1967年7月25日）：124.
- 26 森崎和江「非政治的基底からの共闘」『異族の原基』（大和書房、1971；初出『現代の眼』9月、1970）：236.
- 27 *Ibid.*：235-236.
- 28 *Ibid.*：238.
- 29 *Ibid.*：242.
- 30 森崎和江「民衆ことばの発生」（『匪賊の笛』葦書房、1974；初出『月刊百科』116, 1972）：38.

Abstract

Thought on Solidarity Beginning from Encounter: Relationships between Kazue Morisaki and Okinawa

Machiko YAMAMOTO

The politics of the relocation of US Marines on Okinawa has become a place of building transnational solidarity for demilitarization among Guam, Okinawa, and Japan. However, the solidarity is prone to be an empty symbol if people discount the need of taking locally grounded actions.

In light of the current situation, Kazue Morisaki, a poet of migrant origin, is mentioned. Kazue Morisaki was born in Korea in 1927 and migrated to Japan in 1944, where she witnessed the subtle elements that contributed to building of relationships between different ethnic groups in the same habitat. Through her observations of the working-class in Okinawa in the post-war period, and involvement with impoverished young labourers through the activism with “The Association of Learning Okinawa (Okinawa wo kangaeru kai)” from 1969 to 1971 in a post mining area, Chikuhou in Fukuoka, she found the significance of making a place to encounter and have relationships between elites and subcontract workers and among the unorganized labour forces. She put emphasis on that the place has a potential to build relationships based on taking locally grounded actions through raising issues from their own day-to-day experiences. The relationship of the people with different background worked as an alternative to their environment rooted in the emperor system that denied such diversity.

This perspective from Morisaki reveals a way in which the protesters, and supporters of the protests, can confront local and transboundary issues together not only through being joined into a single group, despite their diverse backgrounds, but also through generating their shared opposition to oppression that they have suffered in their own daily life setting.

